第3章　まとめ

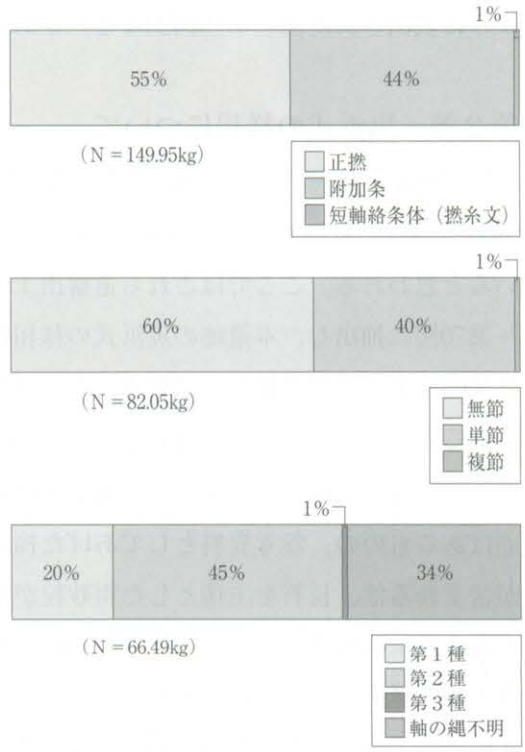
第1節　黒浜式の縄文原体について

多種多彩な縄文原体を製作した関山式と比較すれば、黒浜式の縄文原体は貧弱であることは否めない事実であり、型式間のヒアタスも強く感じられるところである。このような理由からか、関山式を中心に羽状縄文土器群前半の縄文原体を追求した既往研究がある一方で、黒浜式の縄文原体に関する研究は管見の限りではあるが、各論を述べたものはあっても総論的に検討したものはなかったと思われる[1)]。

本項も黒浜式の縄文原体を深く追求するものではないが、原畑遺跡の黒浜式は後述するようにごく一部を除き同式でもより古い部分の好資料と考えられるため、縄文原体の内容から何か特徴的なことが捉えられないかと考えた。今回は住居跡出土の黒浜式に限って縄文原体を分類したが、その結果、大きく捉えて無節・単節・複節という正撚の縄文（結節回転を含む）、反撚の縄文、附加条縄文、前々段合撚（異節）、短軸絡条体を回転施文したいわゆる撚糸文が確認できた[2)]。各々の重量を集計した上で、3つの項目を設けそれぞれを重量比で表した（第67図）。なお、縄文が施される住居跡出土土器の総重量は約150kgであるが、反撚の縄文と前々段合撚（異節）は微量であったため重量比から除外している。

正撚縄文は約55%、附加条縄文は約44%、撚糸文は約1%である（第67図上段）。より安定した撚りが得られる正撚が半数以上を占めるのは従来の知見どおりと思われるが、附加条縄文が半数近くを占めることはおそらく予想外の結果であり、一遺跡の集計ではあるがこのような結果が数字で示されるのも初めてと思われる。これに比して黒浜式に一定量存在すると従来から言われてきた撚糸文が極端に少ない。この理由等については附加条の内容に触れた際に述べることとする。

正撚縄文では無節が約60%、単節が約39%、複節が約1%である（第67図中段）。従来の知見どおり無節縄文が多数を占めている。図では示していないが無節はLが約55%、Rが約45%、単節はRLが約40%、LRが約60%、複節はLRLが約45%、RLRが約55%である[3)]。この数字を見ると単節にはやや量的差が認められるものの、総じて左撚り：右撚りの比率はほぼ均衡していると見て良さそうである。黒浜式は羽状縄文土器群であるので比率が均衡しているのは当然と思われるかもしれないが、実際は羽状構成をとらない単方向の斜縄文が施される個体資料も多く存在している。本遺跡では羽状構成の有無を問わず、左撚り、右撚りの縄文原体がほぼ同じ割合で用いられていた可能性を指摘しうる[4)]。また、これも図示していないが還付末端となるものは無節では約11%、単節では約4%を確認しており、二ツ木式から関山式に盛んに用いられた還付末端が一定量残存していることがわかる。



第67図　縄文原体の重量比

附加条では附加条を軸の縄と同方向に絡げた第１種が約20%、附加条を軸の縄と反対方向に絡げた第２種が約45%、附加条を軸の縄に右巻きし、左巻きしている第３種が約１%、軸の縄は不明であるが附加条と判断されるものは約34%となる（第67図下段）。軸の縄に絡げた附加条は１本から４本まで確認できる。統計処理は行わなかったが、２本用いたものが最も多いと思われる。種別で最も多い第２種では、附加条に繊細な縄を用い幅のある軸の縄を地にして対比的な効果を醸出した例（図版34－８）や、附加条を３～４本用いたり太い２本を用いたりして附加条に幅を持たせ、軸の縄の条を分断させることで、関山式で盛んに用いられた直前段合撚の擬似的効果をもたらした例（図版35－１）がある。このように第２種は他の附加条に比べより施文効果が高いことから、盛んに用いられた可能性がある。

軸の縄は不明だが附加条縄文と判断したものは全体の約1/3ある[5]。規則的に条間の空いた回転圧痕の多くを撚糸文とせず附加条縄文と考えた理由は、駒形遺跡の報告で既述しておいた[6]。要点を再度述べれば、２条以上が組になり規則的な間隔をおいて施文されている場合、軸に棒状工具を用いた撚糸文より軸の縄に撚紐を絡げた附加条の方がより軸に絡みつくので、２条以上があまり緩むことなく安定して表出される可能性が高いと、土器の観察結果及び製作原体の施文実験から判断できたためである。また、第１種・第２種に識別されたものの中にも附加条が軸の縄より突出するためか、部分的に軸の縄が付いていない或いは付きにくくなっているものが実際認められることから、この考えは補強されよう。今回はこれらの理由に加え、施文単位方向に対して条間の空いた回転圧痕が斜位にあるものを附加条縄文（図版35－３・４）、同一方向にあるものを撚糸文（図版35－５）と判別した。今まで撚糸文とされた事例中には、軸の縄が不明である附加条縄文が相当数含まれていると考える。

原体の素材は一般的には細かく裂かれた比較的軟らかな繊維をよく撚り合わせているが、中には樹皮など硬い繊維を用いよく撚り合わせていないものがあると指摘されている（山内1979）。素材は不明であるが、本遺跡の無節の中に撚りに用いた繊維が硬く粗いためか、繊維痕の器面への食い込みが節があるかのように表出された例（第18図23など）があることを付記しておきたい。

第２節　黒浜式の様相について

原畑遺跡では黒浜式に帰属する竪穴住居跡19軒、土坑４基が検出され、良好な資料が得られた。中でもSI001・003・005・008・011・014・015・019出土土器は充実した内容で、相互補完的に型式内容を示していると思われる。ここではこれら遺構出土土器を中心に遺構、遺構外出土を併せた主要な資料を第68図１～第70図に抽出し、本遺跡の黒浜式の様相についてまとめておきたい。

第68図１～８は具備する諸要素から、羽状縄文系土器群の前型式である関山式の遺制が認められるものである。１は口縁端部の刷毛目状沈線（短沈線帯）、半截竹管内側を強めに引いた平行沈線による文様モチーフ、還付末端羽状構成による横帯区画の採用など関山Ⅱ式的要素を種々持つ土器で、平縁と波状縁の差はあるものの、参考資料としてあげた福島県塩喰岩陰例に酷似している。また、胎土中には少量の繊維が含まれる他、長石を主体とした粗砂粒が多量に含まれる。塩喰岩陰例を実見していないが、この胎土は大木２式に特徴的である[7]。２・３は同一個体であるが欠損部があるため、口縁端部の刷毛目状沈線、還付末端羽状構成による横帯区画の採用以外の情報は得られない。４・５は還付末端縄文が施されるもので、４は甕形である。参考資料は隣接する駒形遺跡SI014例で、還付末端施文の好例である。６は前々段合撚（異節）縄文が施されるもので、参考資料はやはり駒形遺跡SI014の好例である。７は注口部の形状が関山